

# 令和六年度 奈良県知事賞

## 命を繋ぐ

奈良県立大学附属高等学校1年 吉田 奈々

私には一度も会ったことが無い兄がいる。兄は、私が産まれる三年前に亡くなった。

私の母はHELLP症候群という病気だった。HELLP症候群は、通常肝細胞の中で働いている酵素が血液中に漏れ出すことで、肝臓が大きなダメージを受けてしまうという病気で、治す為には分娩を促して妊娠を終わらせる必要があった。この治療の厄介なところは、発症時期と母体の状態によっては未熟児・低体重児でも分娩を促す必要があるところだ。ある程度、胎児が成長した段階での発症だと子どもが助かる確率は高かったのだが悔しくも、母と兄は前者だった。

そして十八年前、兄は未熟児のまま、五百五十一グラムという通常の六分の一ほどの体重でこの世に誕生した。産まれてすぐに兄と母は引き離され、兄の小さい体にはたくさんの機器を繋ぎ、たくさんの人が一生懸命に彼の命を繋ぎ止めようとした。しかし、懸命な治療の末、誕生から二週間後に兄はこの世を去った。わずか二週間、されど二週間。兄は必死にこの世を生き抜いた。

ところで、兄の命を繋ぎ止めるのもタダではいけない。母には高額な医療費が請求されることになった。しかし、母がこの高額な医療費に悩まされることは無かった。なぜなら税金が医療費を負担してくれたからだ。

日本には、「乳幼児医療助成制度」という制度がある。これは、子どもが生まれてから一定の年齢に達するまでの通院や入院で発生した医療費の自己負担額を助成する制度である。この制度で使用されるお金は主に私達が納めている税金で賄われている。

税金のおかげで、本当なら産まれて一日も持たなかったかもしれない命が、二週間も生きることができた。税金のおかげで、兄は必死に必死に二週間、生きようと頑張ることができた。

残念ながら、兄はもうこの世にはいないが、兄のような新生児や、母のように病気を抱えた人はこの世に五万といる。私達が税金を納めることでそのような人達が少しでも生きる手助けになるし、助かる命ももっと増えると私は思う。私や私の家族にとって兄は立派な家族の一員で、ずっと私達の心の中、記憶の中に生き続けている。私は、兄と過ごす時間を少しでも増やしてくれた税金という存在に心から感謝している。だから、今度は私が恩を返す番だと思う。身近な経験を経て、大人になっていく今、税金というものの大事さをもう一度しっかり再確認し、しっかりと納めていこうと思う。